

放課後身体検査～クラス委員長編～ 【特典台本】

※一部本編内容と異なる箇所がございます。予めご了承ください

優衣 「ん、ごめん。もうちょっと奥のほうに行ける？」

優衣 「ありがとう。さっきからグイグイ背中を押されちゃって……」

優衣 「満員電車はいつものことだけど、今日は特に多いよね」

優衣 「このまま後１０分……いつも思うけど長いわ」

優衣 「まあ、いつもあなたが一緒に登校してくれるから、退屈はしてないんだけど」

優衣 「あっ、大丈夫？ そっちも結構押されてるみたいだけど」

優衣 「そうだよね。そっちからもグイグイ来るし……ああ、早く駅についてほしい……」

優衣 「うん？ 私？ ……私も大丈夫。なんとか踏ん張れるから」

優衣 「でも、本当に毎日これだと疲れるよね。電車の時間変えようかな」

優衣 「そう、一本早く。そしたらもうちょっとマシでしょ」

優衣 「……ただ、一本早くすると、20分は家を早く出ないといけないし……」

優衣 「教室に着いてからも暇だもんね。こんな感じで誰かと喋ったりして時間を潰せるといいんだけど……」

優衣 「あなたは？ 私が電車変えるって言ったら一緒に変える？」

優衣 「えっ？ いいの？ 20分って結構大変よ」

優衣 「そう？ 付き合ってくれるなら……本当に変えようかな」

優衣 「あーっ、でも20分早く起きるのはきついし……」

優衣 「んっ？ クラス委員長だし朝強そうだって？ ないない！ どっちかって言う朝は弱いほうだし」

優衣 「それでも結構頑張ってるんだから。目覚まし時計三つ使ったりとか」

優衣

「クラス委員長が遅刻するのも印象悪いしね。せっかく推薦してもらったんだから、ちゃんと頑張りたいし」

優衣

「えっ？　頑張ってる？　誰が？　……私？　全然だよ。必要最低限のことしかやってないし」

優衣

「この前、本を没収してた？　だって、あれは学校に持ってくる必要のないものだったし」

優衣

「怖くないかって？　それはあんまり……うちのクラスの男子、みんな優しいし」

優衣

「でも、アレだよな。そういうの……好きな子が多いよね」

優衣

「ほら、男子特有っていうか……そういう本。時々持ってきて来ている人がいるでしょ」

優衣

「没収するの怖くはないんだけど、そういう本だってわかるとすごく恥かしいんだよ、あれ」

優衣

「そうだよ。恥ずかしいの我慢してやってるんだから」

優衣 「まあ、男の子ってそういうのに興味あるみたいだし、仕方ないかなって——」

優衣 「きゃっ!？」

優衣 「ん、つう……だ、大丈夫? ごめんね。思いつきり押しちゃって」

優衣 「……って、なんか、後ろからすく押されて……ごめんね。すぐ離れる……」

優衣 「あ……」

優衣 「えっ? いや、何かあったっていうか……その、あなたの手が……私の、胸に……」

優衣 「って……今気付いたの?」

優衣 「ち、ちょっと待って……窮屈だろうし、すぐ離れるから……」

優衣 「んんっ、く……うあ、だめ……全然動けない。そっちは?」

優衣 「ああ、そっちも押されてるんだ」

優衣 「んと……これって、あなたの手が……あなたと私のは間に挟まって……も、もしかして、抜けなくなってる?」

優衣 「うくっ……いい、いい。動かさないで。動かされる……へ、変な感じ、だから……」

優衣 「うん、もう……そのままでもいいから……」

優衣 「し、仕方ないよね……満員電車だし……」

優衣 「うん……早く……駅に着くといいね」

トラフィック●放課後身体検査

優衣 「これでよし、と……日誌終わり」

優衣 「あなたも日直の仕事終わった？ お疲れ様」

優衣 「なんか……今日は朝から疲れたよね。すごい満員電車だったし、ちょうど日直でやることも多かったし」

優衣 「あとは、机の引き出しに忘れ物がないか確認して帰ろっか」

優衣 「私、こっちのほうから見るから、あなたはそっち側から見てもらえる？」

優衣 「えっと……これはよし……こっちもよし……こっちは……あ、教科書置きっ放し」

優衣 「これはOKで……こっちも問題なし……こっちのは……何これ？ 手帳かな？」

優衣 「忘れ物になるのかな？ ……先生に渡しておけばいいか……」

優衣 「こっちはOK……こっちは……あ……本がある」

優衣 「あっ、これあなたの机だね。本が入ってるよ。忘れないようにね」

優衣 「本？ ……じゃないよ。引き出しに本が入ってるよ。ここ、あなたの机でしょ」

優衣 「教科書じゃないみたいだけど………へっ！？」

優衣 「あ、えっ？ ど、どうしたって……いや、びっくりしたんだけど……」

優衣 「これ……あなたの？ 机の中に入ってたけど」

優衣 「ん？ なんで驚いてるのよ。自分のでしょ………そのエッチな本」

優衣

「まあまあまあ、そんなに慌てたふりしなくてもいいから。時々友達とこっそり見てるの知ってるし」

優衣

「だって、廊下の隅のほうでコソコソしてたりするでしょ。あれ結構目立つよ」

優衣

「たぶんそういう本読んでるんだろうな〜って思ってたし」

優衣

「さっきも言ったけど、興味があるのは当然だと思うから。ただ、学校に持って来たらダメだけど」

優衣

「まあ……あなたには色々助けてもらってるし、今日は見なかったことにしてあげる」

優衣

「うん？ まあ、そんな友達に押し付けられたとか言われても、本当かどうかわからないし」

優衣

「ほらほら、早く鞆にしまったら？ それとも一緒に読む？」

優衣

「読んでもいい……？ ……あ、いや、まあ……読んだことないし……き、興味がないわけじゃないけど……」

優衣

「そりゃ女の子だって多少はそういうのあるから……どういふものなのかなって思ったりはするけど……」

優衣

「……ほ、本当にいいの？ 誰にも言わない？ 絶対秘密にしてくれる？」

優衣

「し、信用するからね。………うん、じゃあ、ちょっとだけ………」

優衣

「うっわ……おっぱい……」

優衣

「えっ？ だって、ほら、おっぱい出てるし」

優衣

「うん、本当に初めて。こういうの見るの」

優衣

「なんか……すごいね。こんなに堂々と見せてるんだ」

優衣

「すごい……綺麗な形……みんなこんなに大きいものなの？」

優衣

「は、はいっ！？ 私も大きい！？」

優衣

「な、なんであなたにそんな事言える………あ、そ、そっか……」

優衣

「あ、あははっ、そうでした。今朝、触られたんだっ」

優衣 「……忘れてたってわけじゃないけど、い、意識しないようにしてたから」

優衣 「意識すると、は、恥かしいし」

優衣 「こ、こんなのじゃないって！　こんな本に載ってるみたいに大きくないから！」

優衣 「え、ええ……大きいの？　っていうか、そういう目で見てたの？」

優衣 「あ、別に怒ってるわけじゃないんだけど……なんか、そう言われると、恥かしくなってくる」

優衣 「自分でも……よくわからないんだよね。あんまり友達の見えないようにしてるし」

優衣 「その……せ、せっかくだから訊いちゃうけど……ど、どうだったの？」

優衣 「だから、ほら……私の、胸……お、大きさ、とか、「う……形とか……」

優衣 「えっ？　わからないの？　服の上からだったから……？」

優衣

「ああ……そういうものなんだ。なんか……電
車に乗ってる間、ずっと触られてたから、
色々わかつちやったのかと思って」

優衣

「そっか……わからなかったんだ……」

優衣

「気になるのかって？ そりゃ、ね……あんま
り人と比べる機会もないし……」

優衣

「身体検査？　そういうときもあんまり人のほ
う見ないから……」

優衣

「……あなたが身体検査をする？　ど、どうい
う意味？」

優衣

「あつ、もしかして……エッチなこと言っ
てる？」

優衣

「うんじゃないよっ！？　びっくりした！」

優衣

「もう……身体検査って何するつもりだった
の？」

優衣

「えゝ？　興味があるとかじゃないけど……
…うん、まあ……気にはなるかな……」

優衣

「もしかして、女の子の体に詳しいとか？　こ
ういう本見てるし……」

優衣

「そこそこ？ 見てるんだ、やっぱり……」

優衣

「んゝっ、変じゃないかどうか、だけ……とか……」

優衣

「は？ じゃなくて……身体検査……変じゃないかだけ……確認してもらおうかな……とか」

優衣

「な、なんでそんなに驚いてるの。あなたから話を振ってきたんじゃない！」

優衣

「本当にすると思わなかったって……わ、私も思わなかったけど……」

優衣

「でも、ほら……他の男子は嫌だけど……あなたは、こう……仲いいし……こ、こういう事も……話せるっていうか……」

優衣

「ん……そ、そっちが嫌じゃなかったら……み、見るだけね！ 見て……変じゃないか……どうか……」

優衣

「本当？ 嫌じゃない？ っていうか引かない？ こういうのって……」

優衣

「それなら……いいけど……」

優衣 「じゃあ……上着……脱ぐから……そ、そっち
向いてて」

優衣 「どうせみるのに？ ……そ、それはそうだけ
ど！ これから見てもらうんだけど！ 脱ぐ
ところを見られるのは……恥ずかしいし…
…」

優衣 「えっ？ 見たいの？ ええっ……すごく恥
ずかしいんだけどな……」

優衣 「まあ、こっちからお願いしてるんだしね。わ
かった。……見てて……いいよ」

優衣 「な、なんか緊張する……視線が熱いんですけ
ど……」

優衣 「あれだよな。誰か来たら大変だよな」

優衣 「えっと……はい……脱ぎ、ました」

優衣 「えっ？ ブラ？ いやいやいや、ブラは取ら
ないでしょ」

優衣 「えええっ、そこまで取ると思ってたの！？
いやっっ、それはさすがに……」

優衣

「それで……胸、……やっぱり大きい？ 膨らみ始めた頃から、一気にここまで大きくなっただけど」

優衣

「結構恥ずかしくて……私、発育も早かったから、男の子だけじゃなくて女の子の視線も気になって……」

優衣

「だから、今でも着替えの時間とか、他の子の視線が気になっちゃって苦手なんだよね」

優衣

「……ちなみにあなたって、結構女の子の胸を見ていたりするの？」

優衣

「いや、なんか……落ち着いてる感じがするし……慣れてるのかなって」

優衣

「えっ？ 緊張してるって？ してるの？ 本当かなあ」

優衣

「……って、何じつと胸を見てるのよ！」

優衣

「隠さないでって……隠すよ！ 恥ずかしいんだから！」

優衣

「ブラを取らないと、ちゃんと大きさがわからないって？」

優衣

「わかるでしょ！ 絶対そういう理由じゃないよね！？ 直接見ただけでしょ！」

優衣

「そうですって……そんな堂々と言われても……」

優衣

「……………ほ、本気？ 本気で言ってるの？」

優衣

「あ——っ……………そうなんだ」

優衣

「ん、んっ…………じゃあ…………ちよっただけ、なら…………」

優衣

「わっ…………そんな、大きい声出さないで…………」

優衣

「ちよっただけ！ ちよっただけだよ！ どこか変じゃないか…………この際だからちゃんと見てもらいたいし…………」

優衣

「本当に…………ちよっただけ、だからね」

優衣

「……………どう、かな？」

優衣

「……………な、何か言ってよ。じっと見てないで」

優衣

「ん…………恥ずかしいんだから何か言ってよ！ 「こっぴうの本で見てるんでしょ！」」

優衣 「本物は初めてって……まあ、そうなのかもしれないけど……」

優衣 「それで……本当にどこか変じゃない、かな？」

優衣 「自分だとよくわかんなくて……男の子から見て、大きすぎて気持ち悪かったりしないかなって」

優衣 「それはない？ 本当に？」

優衣 「それに……ぐ、ぐっとくるって何？ ドキドキするとかそういうこと？」

優衣 「よくわかんないって……そんな事言われても私もわかんないし……」

優衣 「……あの、も、もういい？ 服着ても……ずっと裸なのは恥ずかしいし」

優衣 「もう少しって……じゃあ……本当にあともう少しだけだよ？」

優衣 「……こんなの見てて面白いかなあ……ねえ、なんで男子っておっぱい好きなの？」

優衣 「わからない？ わからないんだ？ ……へえ、っ、そういうものなんだ」

優衣 「はい？ 触りたいって言われても……いや、触るのはさすがに………」

優衣 「あ、あ……そんな落ち込まれても………」

優衣 「落ち込んでないって？ いやあ、今ものすくがっくりしてたよ？ しゅーんって感じで」

優衣 「うーん……やっぱり、触りたいものなの？」

優衣 「んーっ、本当に変じゃないか見てもらうだけのつもりだったし……そこまでは考えてなかった、かな」

優衣 「でも、形とか……見てもらったんだし……それのお礼ってことなら……ち、ちよっただけ……」

優衣 「って、急に浮かれすぎ！ それに、ちよっただけだよ？ そんなに長くはダメだからね！」

優衣 「それでいいなら……ちよっただけ………いいよ」

優衣 「んっ……ん、ふっ………んふっ、く、くすぐりたい」

優衣

「あーっ、んっと……えとね……も、もう少し、ちゃんと触ってもいいよ。撫でられるみたいになれるとくすぐったいから」

優衣

「んんっ……そのくらいが、いい、かな」

優衣

「うん……痛くはないし……なんか……体、熱くなってくる」

優衣

「あははっ、ドキドキする……こんなの初めてだし……」

優衣

「アレだよ。電車の中で……触られた時も……ドキドキしたんだから……」

優衣

「男の子に……触られるのって……初めてだったし……」

優衣

「まさか放課後にこんなふうになるとは思わなかったけどね」

優衣

「ん、んっ……ちよっと……揉んでない？……やっ、揉んでるよね！　ほら、むにと……！」

優衣

「ち、ちよっとなら……いいけど……」

優衣

「嫌ってわけじゃないし……は、恥ずかしいけど……し、仕方ないかなって……」

優衣

「男の子だもんね。触ってたら………そ、そういうふうになるもの………でしょ？」

優衣

「あははっ、よくわかんないね。私もわかんない。何言ってるんだろ」

優衣

「はーっ………暑い………なんかすっごく暑くなってきた」

優衣

「んっ、ふっ………く、う………変な声、出ちゃう」

優衣

「うん？ 気持ちいいかって言われると………気持ち良くないわけじゃないけど………」

優衣

「こう、ドキドキが大きくなって………頭がボーンッとしてくる感じ、かな」

優衣

「痛くはないよ。もうちょっと強くても………たぶん………大丈夫」

優衣

「あ、でもあんまり——ひゃわっ!？」

優衣

「ちよっ、ダメ！ 待って！ 乳首はダメ！」

優衣

「よ、弱いっていうか………し、刺激が強すぎて………」

優衣 「あー、うん、まあ、弱いと言えば弱いのかも
しれないけど……」

優衣 「んあっ！？ ダメだったら！ 声、出ちゃう
し」

優衣 「痛いわけじゃないよ？ ん、まあ……..
ちよつと、気持ちいい、かも、だけど……」

優衣 「ダメダメダメ！ 本当にダメ！ 触られると
……ビビビッて感じがするから」

優衣 「んゝゝゝ……ちゃんと心の準備してたら……
我慢できるかもしれないけど……」

優衣 「ええっ、そんな……もう少し触りたいって言
われても……」

優衣 「いやっ！ た、勃ってるのは、これは、違
うっ……！」

優衣 「最初から！ 最初からこんな感じだったっ
て！」

優衣 「やーっ、もう！ いちいち言わないで。触ら
れたんだから仕方ないでしょ」

優衣 「き、気持ち良かったっていうか……痺れた感じがして……こう……ちよっと、良かったけど……」

優衣 「もっと触ってあげようかって何！？ 自分が触りたいだけでしょ！」

優衣 「う……う……う……う……じゃあ……や、優しくね？ あんまり強くしないでよ？」

優衣 「んっ……んうっ……！」

優衣 「ふ、ああっ……うん、大丈夫、う……痛くは、ないから……」

優衣 「はあっ……あ、そのくらい、の、強さなら……いい……」

優衣 「あ、あっ、乳首……か、硬く……なっちゃう……う、ううん……は、あっ……！」

優衣 「ひ、引かない？ こういう声……んあっ、だ、出しちゃって……」

優衣 「そう？ それなら……んく、あっ……いいんだけど……」

優衣 「そんな……ふ、うっ……エロい、とか、言われても……」

優衣 「はあっ……はあっ……ああっ、あ、あれえゝ？　こんなに、んんっ、か、感じないんだけど……普段は……」

優衣 「あ……ふ、普段から、んつく……さ、触つてるとか、じゃ、ないからね……」

優衣 「ああ、ドキドキして……息……苦しく、なってきた」

優衣 「しゃぶりたくなってきた！？　何を！？」

優衣 「ええっ！？　おっぱいしゃぶるの？　赤ちゃんみたいにな？　ううっ……そ、そういう趣味あるの？」

優衣 「普通じゃないと思うんだけどなあ……ええ、するのぉ？　ホントにいい？」

優衣 「し、したいなら……ちよつとだけ、なら……いいけど……」

優衣 「……なんか、さっきからちよつとだけちよつとだけって言うてるけど、全然ちよつとだけじゃないよね」

優衣

「あはは……もういいけど……んんっ、やっぱ
り……」「ういうふうになると……とまらない
よね」

優衣

「なんとなく、「こ、こうなるんじゃないかって
気はしたけど……」

優衣

「あ、いいよ。しゃぶる、んだよね？ 歯は立
てないですよ？」

優衣

「じゃあ……どうぞ」

優衣

「んんっ……ふ、う………あ、あっ、舐め
る、と………ふあっ………」

優衣

「ヤバイ、これ………おもっ………てたより…
…んっく………いい、かも………」

優衣

「ふうっ……ふうっ………油断すると、くっ……
………声、出ちゃう」

優衣

「そんなに、吸って……んふ、う………お、面白
いの？」

優衣

「面白いとか……んくっ………そういうのじゃな
いの？ んんっ、よく、わかんないけど…
…」

優衣

「はあっ、体………熱くて………汗、出てきた」

優衣

「あ、あぁっ、そんなに、す、吸われると……
あ、あっ、ふふっ、本当に赤ちゃんみたい」

優衣

「でも、んくっ……ふ、ふふっ……なんなんだ
ろね、これ……んんっ、クラスメートに……
ん、ふっ、おっぱい、吸わせてあげる日
が、くるなんて……思っ……」

優衣

「あぁ……ちよっ、と……乳首、を、ずつ
と、舐められる、のは……ヤバイ」

優衣

「こ、興奮……してくる、かも……」

優衣

「本当に、んくっ、このこと……んうっ……
だ、誰にも、言わないでよ？」

優衣

「んんっ、本当に、本当だからね？ う、
くっ、他の男子に、あっ、じ、自慢したり、
とか、ううっ、本当に、あ、ヤバイことに、
んん、うっ、なるんだからね？」

優衣

「はぁっ……はぁっ……もう、これ……身体検
査とか、あ、か、関係ない、ね」

優衣

「あ……終わり？　しゃぶるの満足した？」

優衣

「んあっ！？　なに？　また揉むの？　あ……
……あ、あぁっ、なんか、ヤバイ」

優衣

「さっきから、ヤバい、って、言って、ばっかりだけど……あ、んんうっ……揉まれてると……すごく……き、気持ちいい」

優衣

「こんなふうに、んっく……感じたこと……んんっ、ないんだけど……」

優衣

「もしかして……あなた……ん、こういうの、ん、うっ……初めてじゃない、とか？」

優衣

「……そんなこと、ないって？ あ、ああっ……そこ、お……」

優衣

「あ、ごめん。変な声でた、あ……んうっ、あ、謝る、必要ないって……それは、あ、そう、なんだけど……」

優衣

「はあっ……はああっ……変な気分になってきちゃう」

優衣

「んあっ、こんな、おっぱい……グネグネされたの、ん、うっ、初めて……」

優衣

「でも、本当に……んんっ、飽きないの？」

優衣

「ずっと、さ、されてると……んん、あっ……ちよっと、ふ、不公平な、感じ……してきた」

優衣 「さつきから、なんか……膨らんでない？」

優衣 「どこがって……そこ……そこよ、そこ……そう……ズボン……」

優衣 「もしかして……お、大きくしてるの？」

優衣 「べ、別にじっと見てたわけじゃなくて、そんなに膨らんでたら気付くでしょ！」

優衣 「……本当に……大きくなるんだ？」

優衣 「えっ？ き、興味って……そりゃあ……ない、わけじゃないけど……」

優衣 「えええっ、さ、触るって？ それ、は………ええっと……」

優衣 「い、いいの？ 嫌じゃないの？」

優衣 「確かに……私も触らせてるわけだけど……触らせてるっていうか、しゃぶらせたりもしたんだけど……」

優衣 「本当に……いいなら……さ、触りたい、です」

優衣

「んふふっ、なんか敬語になっちゃった」

優衣

「じゃあ……ちよつと交代しよ？ 私も触ってみたいし……」

優衣

「あーっ……えっと……その椅子に座ってもらっていい？」

優衣

「それで……私が正面に座って………こういう感じでいいかな」

優衣

「うわあ………改めてこうやって見ると、本当に大きくなってる」

優衣

「なんだか苦しそう………触ってもいいのかな」

優衣

「はいっ！？ だ、出していいって………えっ！？ さ、触るって直接なの！？ ズボンの上からじゃなくて！？」

優衣

「あ、いやっ………嫌、じゃ、ないけど………」

優衣

「う、うん、おっぱいはね………おっぱいは触らせただけ………でも、ほら………こっちは、いわゆる性器だし………」

優衣 「ほ、本当にいいの？ 私なんかに見せちゃって……」

優衣 「あ、うん、私もおっぱいは見せたけど……」

優衣 「ん……じゃあ、本当に出すよ？ あとで怒らないでよ？」

優衣 「それじゃあ……この、チャックを下ろせばいいんだよね？」

優衣 「こう……かな？」

優衣 「……で、出すってことは……こ、この中に手を入れてもいいの？」

優衣 「入れるよ？ 本当に入れるからね？ ……じゃ……失礼します」

優衣 「わっ、硬い……こ、こんなになるんだ……熱いし……」

優衣 「あ、ここからかな？ このまま引っ張っていいの？」

優衣 「少しズボンもずらすよ？ 痛かったら言っ
てね？ ……よい、しょ」

優衣 「わっ！？ ……………すっ、」……………えええ
……………」

優衣 「何これ？ こんなに大きいの？ えっ？ 男
の子ってみんなこんな感じなの？」

優衣 「普通……………これが、普通なんだ……………」

優衣 「わあ…………揺れてる…………動くんた……………血管
浮いてる…………初めて、見た……………」

優衣 「えっ？ 当たり前でしょ。こんなの見る機会
なかったし」

優衣 「なんか…………す」過ぎてなんて言えいいか…
……………」

優衣 「……………あ、」めん。じつと見ちゃっ
て」

優衣 「い、いいの？ もう少し見てていい？」

優衣 「そう……………じゃあ……………もうちょっとだ
け……………」

優衣 「これが…………皮、なんだ…………皮を被ってるとか
言ったりするみたいだけど、これが被る
の？」

優衣

「あ、これ？ 先っぽ？ え……さ、触ってもいい……って言われても……」

優衣

「これも……身体検査なの？」

優衣
「まあ……そういうことでいいなら……触るけど……触らせてもらうけど……」

優衣

「じゃあ……………」

撫でて、みたり……………」

優衣

「あ、今、声が出た？　今みたいなのでも……
こっ、すごい……反応するんだね？」

優衣

「ちなみに、どのへんが……その……気持ち、良かったり……するの？」

優衣 「握る？ 握るって、ぎゅって握っていいの？
.....」のへん？ い、痛かったら言っ
てよっ。」

優衣

「このへんを……ぎゅっ、と……うわ、熱い。それにすごく硬い」

優衣

「えっ？ えっ？ いつもこんな感じなの？
違うよね？ ……いつもはもっと小さい
んだ？」

「すごい……こんなに硬いんだ……石みたい」

優衣 「いやいやいや、そのくらい硬いよ。もつとぐにやぐにやしてゐるって思ってたもん」

優衣 「だって人間の体の一部だよ？　こんなに硬いなんて思わないよ」

優衣 「でも、そっか……………このくらい硬くないと……………ダメなんだね」

優衣 「それで……………これを……………擦ったら……………気持ちいいの？　……………こんな感じとか？」

優衣 「あ、また声が出た。……………へえ、本当に気持ちいいんだ？」

優衣 「こう？　こうやって……………んっ……………手を動かしてたら……………いいの？」

優衣 「んっ……………んっ……………んっ……………んっ……………んっ……………んっ……………」

優衣 「スピード……………このくらいでいい？　速すぎるとか、遅過ぎるとかあったら言ってね」

優衣 「……………っていうか、私、すごいことしちゃってる」

優衣 「もう少し？　速くていいの？　……………」のくらい？」

優衣

「んっ……んっ……んっ……んっ……んっ……んっ……んっ……」

優衣

「わあ……本当に気持ち良さそう………そんなに？ そんなにいいの？」

優衣

「どのへんが、いいのかな？ 場所によって気持ち良さが違ったりするの？」

優衣

「ああ……やっぱり違うんだ。へえっ、どのへん？ 今のところが一番いいの？」

優衣

「カリって……ここ？ おちんちんの——
——って、あゝっ……思わず言っちゃった！」

優衣

「何をつて……こ、ここの……呼び方……」

優衣

「うん、そう………ぽろっとね………」

優衣

「は、恥ずかしいに決まってるでしょ。普段言わないし」

優衣

「嫌だよ。もう一回とか。恥ずかしいって言うてるでしょ」

優衣

「……それより、今はこっちを気持ち良くしてあげる………」

優衣 「カリのところって……ちょっと膨らんでる」
こであってる？」

優衣 「ここを……擦るってことは………こんな感じ？」

優衣 「あ、いいんだ。こういう感じでいいのね？
手を……ぎゅっと絞る感じで……？ 意外と
強くしてもいいんだ？」

優衣 「こんな………感じて………強く………
んっ……んっ……んっ……んっ……」

優衣 「ちょっと……わかってきたかも………」

優衣 「……なんか、さっきより硬くなってる？
握ってる感触がちょっと………違う気がするん
だけど………」

優衣 「興奮した？ 擦られて興奮してるの？ そ
う、なんだ……んっ……んっ………こうやって
擦るだけで、興奮するんだ」

優衣 「やゝゝっ、なんか………ちょっと
だけ嬉しいかも」

優衣 「まあ、ほら……………私の手で、気持ち良くできてるんだろって思うとね……………悪い気はないし……………」

優衣 「あれ？ 何か出てない？ 先っぽのところ……………透明なのが……………」

優衣 「これ、いったの？ これが精液？」

優衣 「あ……………違うんだ……………はい？ ガマン？ ガマンって……………何？」

優衣 「ガマン、汁？ ぶふっ！ な、何その名前っ！ 嘘でしょ！？」

優衣 「え、えっ……………え……………っ、絶対嘘っ！ そんなの聞いたことないもん！」

優衣 「ガマン汁でしょ？ そんな名前……………馬鹿過ぎるって……………誰が付けたのよ」

優衣 「え……………ええ……………本当に？ 本当にそんな名前なの？」

優衣 「他には……………カウパー……………液？ それも聞いたことないけど……………」

優衣 「ええ……………本当にそんな呼び方なの？ なんか……………衝撃的過ぎる」

優衣 「それで……気持ち良くなってきたら……こういうのが出るんだ？」

優衣 「気持ちいい？ 本当に気持ちいいの？」

優衣 「気持ちいい……けど？ けど、何？ 言ってくれていいよ。ここまでしてるんだし」

優衣 「ガマン汁を………手につけるの？ 私の方………手につけて………擦る」

優衣 「あっ………あ——っ、そっか。滑りが良くなるんだ」

優衣 「あーっ、はいはい、そういうことね。少し濡らしたほうが滑りが良くなって、それで気持ち良くなるんだ」

優衣 「んっっ、いいよ。あとで手を洗えばいいんだし………そんなに嫌な感じもしないし………」

優衣 「うん、しない。………なんでだろね。………あなた、だからかな？」

優衣 「ほら、クラスでは仲いいほうだし………たぶん、仲良くない男子だったらダメだと思う」

優衣 「あ、それだと仲良かったらこういう事するみたいになっちゃうか」

優衣 「ん、んんんっ、あなただけって言うとおっ
っ、意味深だけど…………でも…………
ちよつとそうかも…………」

優衣 「じゃあ…………ガマン汁、だっけ…………つけて
…………擦ってみるね」

優衣 「んっ…………んっ…………んっ…………んっ…………
んっ…………んっ…………」

優衣 「どう？ さっきよりも気持ちいい？」

優衣 「……………そっか。それならいいんだけど…………
……………いたたっ」

優衣 「あ、ちよつとね…………この体勢、膝が痛くなっ
ちゃって」

優衣 「えっと……………隣に……………行ってもいい？」

優衣 「そう、もう一つ椅子を置いて……………いい？
じゃあ、そうする」

優衣 「よいしょ……………こっち側から……………するね」

優衣

「もう一度、握って……ガマン汁を……こ
う、塗って、いいんだよね？ ……おち
んちに」

優衣

「……ん、言ったけど……だって、
ちゃんと言わないとわかりにくいし」

優衣

「ええっ！？ なんでそんなの聞きたいの。あ
まり気にしないでよ」

優衣

「ええ……本当に聞きたいの？ ……
ぜ、絶対に嫌じゃないけど……恥ずかしいし
……」

優衣

「もうっつ、い、1回だけね。それでいい？
……ん、んっ、じゃあ……」

優衣

「おちんちん」

優衣

「……だ、黙らないでよ！ 余計
に恥ずかしいし……」

優衣

「もうっ……するよ。擦るからね！」

優衣

「んっ……んっ……んっ……んっ……んっ……
んっ……んっ……」

優衣

「……もうちょっと近くのほうがいいかな」

優衣

「んしょっ、と……………あはっ、近いね」

優衣

「でも、このくらい近づかないとやりづらいし……………ん、でも、ドキドキする」

優衣

「だって、男の子とこんな距離で座ってるの初めてだし」

優衣

「なんか、これ……………なんだろうね……………何してるんだろうね、今更だけど……………」

優衣

「朝、電車で胸を触られたときは、すごい事になっちゃったって思ったけど、まさか放課後にこうなるとは……………」

優衣

「あ、ごめん。ちゃんと手も動かすね」

優衣

「んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、んっ……………」

優衣

「こんなに速くて大丈夫？」

優衣

「気持ち……………いいんだ？　っていうか、すごい顔してる」

優衣

「なんか、こう……………うっとりした感じ……………そんな顔初めて見た」

優衣 「私のほうがいいの？ ホントにいい？ お世辞みたいなこと言ってない？」

優衣 「ふうん……………確かに本当に気持ち良さそうだしね……………」

優衣 「先っぽ？ この赤いところが……………一番気持ちいいの？」

優衣 「ん、ふふっ……………ガマン汁でぬるぬるする……………こんなに速くしちゃっても大丈夫なものなんだ」

優衣 「あと、音……………いやあ、ほら……………くちゆくちゅっていつてるから、それが……………エッチだなんて思って」

優衣 「……………」人でするときも、こういう感じにするの？」

優衣 「照れなくていいでしょ！ もうオナ、ニー……………より……………すごい事しちゃってるんだから」

優衣 「言ってる。そんなエッチなこと言ってません。……………ぶぶっ」

優衣 「もーっ、いちいち言わないでよ。自分でもしまったって思ったんだから」

優衣 「そりゃ……………言葉くらい、知ってるよ……………」

優衣 「えっ？ 私？ し、しないよ！ 女だし……………」

優衣 「本当に本当……………したことないよ」

優衣 「……………って、私のことはいいから……………もうちよつとこっちに集中するね」

優衣 「んっ、んっ……………んんっ……………先っぱの、穴が……………ヒクヒクしてる」

優衣 「ここから……………おしっことか……………出るんだよね？」

優衣 「不思議だね。おしっこだけじゃなくて……………精液、も、出るんでしょう？」

優衣 「こうやって、擦ってたら……………気持ち良くなつて……………出るんだよね？」

優衣 「こう、かな？ 上に……………搾り上げるように……………きゅって……………先っぱを……………搾る感じで……………きゅって……………」

優衣 「あっ、ビクッてした。……………今の？ 今の
感じでいいの？」

優衣 「きゅって……………きゅって……………気持ち、
いい？」

優衣 「そう、なんだ……………声も出てるし……………本当
に、気持ちいいんだね」

優衣 「でも、あんまり大きな声出したら、誰かに聞
かれるかもしれないよ」

優衣 「えっ、そうなの？ 声が……………我慢できないく
らい……………？ そんなに……………なんだ」

優衣 「あ、えっ？ げ、限界って何？ ……………イ
クの？ えっ？ 射精？ 射精するの？ こ
こで？」

優衣 「えっ、ええっ、このまましていいの？ 射
精って……………と、飛ぶんじゃなかったっけ？」

優衣 「あ、うん……………じゃあ……………っ、続けるから……………
イキそうになったら教えてね。手で受け止め
てあげるから」

優衣

「んっ……んっ、んっ、んっ、んっ、
んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、
んっ、んっ……」

優衣

「すごい……んっ、んっ、んっ、んっ……
足がガクガクしてる……イキそうなんだ
ね？ んっ、んっ、んっ、んっ……」

優衣

「きゃっ！？ え、えっ……？ わっ、あっ、
で、出て……！？ え、あっ、これ、あ、い
いの？ ずっと……手、動かして……
わっ、わっ、まだ出てる……え、ええ
ええっ……！？」

優衣

「こんなに……う、嘘でしょ……え、ええっ……
……い、1回じゃないの？ あわっ、また出て
る……えええ……こんなに出るものなんだ」

優衣

「あ……止まってきた………終わり？
まだ動かしてたほうがいい？」

優衣

「終わりで、いい？ ん……わかった」

優衣

「は………すっ………すっ………こん
なに出るんだ」

優衣

「くっ……ふふふっ……全然受け止められなくて下にこぼれちゃった。……ちゃんと拭いとかないとね」

優衣

「あゝあ、ハアハアしちゃって……そんなに疲れたんだ？」

優衣

「……ねえ、そんなに……気持ち良かったの？
……ふうん、そうなんだ」

優衣

「あつ、ちよつと見たい。………何をつて……おちんちん………射精した後のおちんちん見せて」

優衣

「いい？　じゃあ、ちよつと観察………」

優衣

「は——っ………すっごいビクビクしてる」

優衣

「本当にここから出るんだね。びっくりしちゃった」

優衣

「………おちんちん、ベトベト………これ、どうするの？　何か拭くものってある？」

優衣

「ん、だよね。ないよね。でも、何かで拭かないと気持ち悪いでしょ？　ハンカチとか持ってる？」

優衣 「……ん？ 今、何か言った？ 言ったよね？
ボソツと」

優衣 「何？ 何かしてほしいことあるんでしょ。…
……ここまでしちゃったし、何かあるなら
言っているよ」

優衣 「……え、口でお掃除をしてほしい？」

優衣 「それ、って……へっ？ もしかして、お
ちんちん？ ……………えっ？ おちんちんを
舐めるの？」

優衣 「ええ……おちんちん、を……………えっ、この
ぬるぬるを、舐めてキレイにするって」
と？」

優衣 「なんか……聞いたことはあったけど……本当
にそういうのするんだ」

優衣 「う、うーん……口でかあ……それは考えて
なかったけど……………精液って、口の中に入
れても大丈夫なものなの？」

優衣 「……………ん、わかった。いいよ。する。……
……うん、本当に」

優衣

「別に無理しているとかじゃなくて……私も興味はあるから……ダメだったらごめんね。すぐにやめちゃうかも」

優衣

「うん、大丈夫。ちょっとだけ……やってみたような気もしてるし……」

優衣

「じゃあ……やってみる、ね」

優衣

「ん、あ……れろっ……うっわ、にっが……!」

優衣

「あ、いや……苦いっていうのも違うかな? なんか……なんて言ったらいいんだろ」

優衣

「れろっ……れろっ……ん、んんっ……やっぱり、苦い、でいいのかも……」

優衣

「精液って……こういう味がするんだ……れろっ……れろれろっ……」

優衣

「苦いけど……れろっ、ずっとやってたら、ちゅっ、ぴちゃっ……慣れて、くるのかな?」

優衣

「あっ、こっちにもついてる……れろっ、れろっ、ん、れろれろれろっ……ん、れろおおっ」

優衣

「んっ、ビクッてした……もしかして、こういうのも、れろれろっ、気持ち良かったりするの？」

優衣

「れろっ、れろっ……そうなんだ……れろっ、やっぱり、ちゅっ、先っぽのところが、れろおっっ、良かったりするの？」

優衣

「このへん？　れろっ、れろれろっ、カリ、だっけ？　ここが……いい？」

優衣

「ん、んんっ、ちゅっ、ぷ……れろっ、れろれろっ、ん、ちゅっ、ちゅっ、れろれろれろっ……！」

優衣

「これで、だいぶ綺麗になったとは思うけど……れろおっ……なんか、また感じてきてない？」

優衣

「えっ？　何？　……もっとしてほしいの？」

優衣

「今度は……啜える……おちんちんを、口の中に入れるってこと？」

優衣

「ん……ここまでやったんだし、いいよ……上手くできるかわからないけど、やってみる、ね」

優衣

「あ…………むうつ……………ん、んんっ……
…お、おつき、い……………」

優衣

「啞える、と…………んぐ、う…………すごい……………
む、ううつ……………は、入り、きららない」

優衣

「これで、ん、んぐ、う……………どうしたら、いい
の？」

優衣

「ん、んんっ…………頭を…………む、ぐうつ……………動か
す？ ん、ぐぐっ……………こんな、感じ？」

優衣

「んぐっ……………んぐっ……………んぐっ……………
…んぐっ……………んぐっ……………んぐっ……………
……………」

優衣

「ん、こほっ……………こほっ……………う、大丈夫……
…ん、むっ、喉に、当たっただけ」

優衣

「結構、ん、ぐっ……………難しい、ね……………んん、
ちゅっ……………れろっ……………ちゃんと……………できてる
のかな？」

優衣

「ちゅぷっ、ん、むうつ……………んぐっ、んぐっ、
んぐっ、う、ううつ……………こうやって、ん
ぐっ、頭を動かして……………すれば……………んぐっ、
んぐっ、んぐぐぐっ……………いいんだよね？」

優衣

「ず、ちゅっ……んちゅっ、口の中、で？
舌？ ちゅぶっ、ちゅぶぶっ、む、ぐうっ…
…「こういうふうに……？」」

優衣

「吸い上げたり、するの？ ず、ずずっ、
ちゅっ……「こういう感じ、ちゅぶっ、か
な？」」

優衣

「自分にはない部分だから、んぐっ、む、ちゅ
ぶっ、よくわかんないんだよね、んぐうっ…
…！」

優衣

「とりあえず……んぐっ、「こういう感じで、続
けるね」

優衣

「んぐっ、んぐっ、う、む、ぐううっ、ず、ず
ずっ、ちゅっ、ちゅっぶ……むぐうっ、ん、
んんっ、ずぶ、う、ちゅるっ……ちゅぶ
ぶっ、む、むぐう、んっ……んっ、ん、ん
んっ！」

優衣

「んふ、あ、熱い……むぐうっ、んくっ、う、
ぶっ……んぐんぐんぐっ、ううっ、ふうっ…
…んぐんぐんぐんぐぐぐぐぐっ……ず、
ずちゅるるるるるるっ……！」

優衣

「む、ぐっ……なんか……ぬるぬるしたのが、
増えてない？」

優衣

「んん、う、これ、もしかして、れろっ……ガマン汁？　また出てるの？」

優衣

「んふっ、ふふふっ……キレイにするために、してるのに、れろっ、また出したら、意味ないじゃない」

優衣

「そのくらい……れろっ、気持ちいいってこと？　んふふっ、なんか、そういうふうに言われると、れろっ、嬉しいよね」

優衣

「じゃあ……もっと、激しくしちゃおっかな」

優衣

「ん、れろおっ、れろれろっ、ず、ぢゅぶうっ、ん、んんっ、ずぶっ、ぢゅ、むううううっ、んぐっ……こんなふうにしても、痛くない？」

優衣

「そっか。良かった……れろっ、れろっ、ぢゅ、ぷっ、ぢゅぷぷっ、む、ぐうっ、んんんっ……れろっ、れろれろれろおおゝゝっ、ん、むっ、れぶっ……んぐうっ、んぐっ、んぐんぐんぐっ……！」

優衣

「んふふっ、ビクビクしてる……そんなに気持ちいいんだ？」

優衣

「だんだんわかってきたんだけど……先っぽ……この赤いところ……すっごく敏感だよね？」

優衣

「舌で……んんっ、くちゆくちゆくちゅっ……って、ずっと舐めてたら、足がすごく震えてるもん」

優衣

「もしかしてイきそうなの？ さっきいったのに？ またすぐに出るものなの？」

優衣

「そっか……それじゃあ……もっと、してあげるね」

優衣

「れろっ、れろおっ、ん、んぶ、う、むぐっ……ん、ん、んんっ……ず、ぢゅううっ……ぢゅぶっ、んんっ、ふふっ、暴れてる……むぐ、う、んぐっ、んぐんぐんぐっ、ぢゅ、ぷっ……」

優衣

「頭も……んぐっ、んぐっ、もっと速くても、いいのかな？ んぐっ、んぐんぐんぐ、ううっ、んぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐうううっ……ぢゅっ、ぢゅぢゅぢゅっ、ぷっ……！」

優衣

「ん、ふうっ……あんまり激しくすると……酸欠を起こしそう」

優衣

「うん、無理はしないようにする……んぐっ、んぐっ、んぐうっ、ず、ぢゅっ、ん、れろっ、れろれろっ、んはあっ……あむうっ、ん、んんっ、ず、ぷっ……ずずずっ……!」

優衣

「ん、んんっ……もう、震えて……んぐっ、ぬるぬる、が……すご、い、いっぱい……ず、ちゅっ……! んんんっ、ここ、れろっ、先っぽ、んむうっ……いっぱい、して、あげる」

優衣

「むぐ、んうっ、ぐ……んぐっ、ず、ぷっ……伊って、いいよ、ん、んんうっ、ず、ぢゅううっ……!」

優衣

「このまま、んぐっ、んぐっ、出して、ぢゅっ、いいから……うん、わかってる……んぐ、う、このまま、ぢゅるるっ、出したら、ん、んうっ、口の中、に……ぢゅっ、精液、出ちゃうよね」

優衣

「でも、口の中、で……ぢゅううっ、伊って、いいよ、ぢゅるるっ、出して、いいから、ん、んぐう、む、ずぷっ、う、ん、ぢゅううっ、ずぷっ、射精して、んんんっ、いいから……!」

優衣

「んぐっ、んぐ、う、むぐ、ず、ぢゅっ、ぢゅぶっ、る、むぐ、う、んんっ、ず、ずずずっ、ぢゅ、ぶっ、るるっ、ぢゅむううっ、んぐっ、んぐうっ、ぶ、ぶぐっ、う、んぐっ、んぐんぐんぐっ、んぐんぐんぐんぐうううううッ！！」

優衣

「んんんんうッ！！？」

優衣

「ん、こほっ……………う、ぶっ……………んんんっ、す」「う……………ほっ……………ぢゅぶ、ううっ……………」

優衣

「う、ううっ、うっ……………す、」……………う、う……………んんっ、まだ、出てる……………」

優衣

「ううっ、く……………う——っ……………うううっ……………」

優衣

「ん、」くっ……………くっ……………ん、んんうっ……………くっ、くっ、くっ……………けほっ……………くっ……………くっ……………う、うっ……………」

優衣

「ん、はあっ……………！　の、飲んじゃったあ！　こほっ、こほっ……………う、だ、大丈夫……………大丈夫だけど、ちょっと待って」

優衣

「こほっ、こほっ……ん、ううっ……出していいって言ったけど……こほっ……出された後、どうするか考えてなかった」

優衣

「ん、うん……なんか、ううってなる味……吐きそうとかそこまで酷くないんだけどね」

優衣

「大丈夫大丈夫。私が出していいって言ったんだから。気にしないでいいよ」

優衣

「それに……ふふっ、2回もイかせちゃった。……これってすごくない？」

優衣

「どう？ すっきりした？ 自分でするより気持ち良かった？」

優衣

「……って、なんかちよっと不満そうにしてない？ それともどこか痛かったりした？」

優衣

「……はい？ 自分だけ……恥ずかしい思いをしたから？ 私の……アソコ、を……見たいって？」

優衣

「ええええりっ、そ、それはちよっと……さすがに恥ずかし過ぎるって言うか……」

優衣 「身体検査？ ああ……そういえば最初はそういう感じで始まったんだっけ。もう忘れてた」

優衣 「私の……身体検査……したい、の？」

優衣 「う、んんんんんっ……ん、わかった。私も見るだけじゃなくていっぱいさせてもらったし……もう……お互いに全部見せちゃおっか」

優衣 「あ、でも、ホンツットーに誰にも言わないでね！？ 絶対よ？ 冗談で言ってるんじゃないからね？」

優衣 「2人だけの秘密……うん、それを守ってくれるなら……いいよ」

トラック●人だけで秘密の身体検査

優衣 「えと……じゃあ、ど、どうしようか？ ……机？ その机に座ればいいの？」

優衣 「こ、こう？ こんな感じ？ それで……足を……上げる？ あ、体育座りみたいに？」

優衣 「それで……足を開く、と……M字開脚？ ……そういう名前があるの？」

優衣

「ん……………わかった。わかりました。つまり
こういうポーズで……………いいのね？」

優衣

「……………うっあああ……………ものすごく恥ず
かしい……………」

優衣

「パンツ……………見えてるよね？……………男の子
にこんな堂々と見られたの初めて」

優衣

「はあ……………恥ずかしすぎて、なんか熱くなって
きちゃった」

優衣

「えっ？ パンツを脱がさせてくれって？ ……
…ええっ……………し、したい、の？ そうい
う、こと……………」

優衣

「ん……………じゃあ……………いい、よ……………脱がせて
も……………」

優衣

「あああ……………恥ずかしくて死にそう……………
…うん、さっきのポーズ、だよね？」

優衣

「じゃあ……………ど、どうぞ……………」

優衣

「……………現実じゃないみたい。……………だつ
て、クラスメートの男の子に……………見られ
ちゃってるんだもん」

優衣 「見えてる？ ……………そうだよね。見え
ちゃってるよね」

優衣 「……………って、ち、ちよっ……………顔っ、近いっ…
…近付けすぎだってば」

優衣 「初めてだからちゃんと見たいって言われても
……………そこ……………に、匂いとか……………するかもしれ
ないし……………」

優衣 「それに……………なんか……………緊張する……………」

優衣 「えっ？ 触りたいの？ ん……………まあ、い
いけど……………優しく、してね？」

優衣 「うん……………ゆっくりと……………優しくしてほしい…
……………」

優衣 「あっ……………ああ……………あ、そこは……………
う、うん、そこは……………いい、ところ……………
クリトリス、う……………」

優衣 「い、痛くはない……………あ、はあっ……………そのくら
いで……………そういう……………転がすみたいなの、感じ
でされると……………ああ……………気持ちいい……………」

優衣 「ん、もうっ、濡れてるとか言わないで。仕方ないでしょ。こんなことするの初めてなんだから……こ、興奮するし……」

優衣 「あ、そこは……あ、あんまり深くは……指、入れないでね」

優衣 「うん……初めてだから……深く入れられると……や、破れちゃう」

優衣 「やだ、音……聞こえた……私、濡れてる……んっ……」

優衣 「あっ！ 濡れた指で、ふ、あっ……クリトリス、う、さ、触られると……あ……」

優衣 「ああ、これは、ヤバい、の……んっ、それされると……感じ、過ぎて……」

優衣 「あ、あ、あっ……そ、そう、あ、その、膨れてるところ……ああっ、クリトリス、あ、んっ、皮から、あ、で、出て、きちちゃってる……」

優衣 「ああああっ、ち、ちよっと、それは……直接、さ、触られると……あ、あっ、ヤバいて……」

優衣 「ずっと……さ、されてたらあ、あ、イク、かも……」

優衣 「あ、んっ、んっ、んんっ、なんで？ んんっ、こんなに、ひ、んっ、気持ち、いいの……初めて……いつも、よりも……！」

優衣 「えっ？ 一人でしたこと、ないって、言ってた？ あ、ああっ、そう、なんだけど………んあっ、う、嘘よ、んあっ、したのと、あ、あ……ふあっ、それ、き、気持ち良すぎ……！」

優衣 「すご、あ……オナニー、より、んく、あっ……今のほうが、あ、ふあああっ、気持ち、いい……！」

優衣 「く、あっ！ あ、ちよっと……待って！ 本当に、イ、イきそ……は、早いっ……！」

優衣 「手、待って、ああっ、と、止め、あ、イクッ、あ、ああああっ、嘘っ、こんな……すぐに……ん、あっ、あ、あああああ……っ……っ……！」

優衣 「イクウウウウウ………ッッ……！」

優衣

「う、うううっ……………うあっ、く…………手、もうダメ！ 手、止めて！」

優衣

「ふ、ううっ、うっ……………ぶうっ……………ぶうっ……………」

優衣

「嘘、でしょお……………こんなにすぐに……………
イっちゃった……………」

優衣

「……………うん、本当にいった。自分でもびっくりするくらい早かった」

優衣

「あなた、なんでそんなに上手いの？ 本当に初めてなの？ ………………なんか信じられないけど」

優衣

「……………って……………ええっ、なんでまたおつきくしてるの？ ………………何が、じゃなくて……………ほら、それ……………おちんちん、また大きくなってるじゃない」

優衣

「私を……………イかせたから？ それで興奮して？ 触ってもないのに、そんなに大きくなるものなの？」

優衣

「また……………イきたくなってる？ そんな感じの顔してるけど……………あっ（気付き）」

優衣 「…………ふふっ、今、何考えてるか当ててみようか？」

優衣 「ちよっと、考えてるでしょ。……………このまま最後までしちやったらって」

優衣 「隠さなくていいよ。私もちよっと考えちゃったし。……………ここまでしてるんだもん。考える方が普通だよね」

優衣 「……………こういうのは、ちゃんと彼氏ができた時って思ってたけど……………こういうのもアリなのかなあ」

優衣 「私も…………私もね、嫌なわけじゃないかな……………上手くできるかは、わからないけど……………」

優衣 「うん、本当に……………大丈夫。意味はわかってるよ。そこまで子供じゃないし」

優衣 「でも、ほら……………ここまでこうなっちゃって……………もう止まれないって感じで……………」

優衣 「だから……………エッチ……………してみよっか？」

優衣 「うん、それじゃあ……そっちの机をここに付けてベットの代わりにしようか」

優衣 「ありがと。それじゃあ……ちようど持って帰る体操着もあったし、これを下に引いて……こうやって寝てつと……」

優衣 「はあ……それにしても私、今……すごい格好してるよね」

優衣 「わかってる……全部見えちゃってるもんね……あゝっ、恥ずかしゝっ」

優衣 「あ……あんまり声出したらヤバイよね。ここ、学校なんだし」

優衣 「……ふふっ、なんかここが学校だつてこと忘れそうになってくる。忘れちゃダメなんだけどね」

優衣 「なんか……不思議な気分……初めてのセックスが、こんな形になるなんて……」

優衣 「うん……するなら……しちゃおか……誰も来ないうちに……」

優衣 「いいよ……きて……」

優衣 「ん……大丈夫。重くないから」

優衣

「ふはっ！ 顔、近っ……！ なんか……
笑わずにはいられないっていうか……」

優衣

「あ、そのまま……ゆっくり！ ゆっくりね？
ゆっくり……近付いてみて」

優衣

「あ……当たった」

優衣

「ん、その……ツンツンしてるのが……お
ちんちん？」

優衣

「えっとね！ ちょっと待ってね！ ちょっと
違うから！ ……も、もうちょっと上……
…」

優衣

「うん、そ、そっちは、違う穴だから……
そう、そのへん……」

優衣

「そこ、かな？ ゆ、ゆっくりね？ ゆっくり
……押してみて」

優衣

「ん、うつ……そう、あってる……
あ、あっ……なんか……ぐぐって、きた」

優衣

「うつ……ちよっと、わかる、う……
ゆっくりね……ん、んんっ……」

優衣

「くっ、うつ……お、押し上げ、られてる感
じ……んんっ……これ、入ってるの？」

優衣 「んつく……こっちの感覚だと、ふ、う……よくわからなくて……」

優衣 「でも……んうつ、お腹の底が……うつ、少し、だけ……押されてる感じ……する」

優衣 「うう、いづツ!? ……う、く……ち、ちよっとだけね、痛かった……」

優衣 「ああ、でも……仕方がないよね。そういうものだし……大丈夫……もう少し、強く、してもいいよ」

優衣 「ふふっ、そりゃ痛いと思うけど、初めてなんだから仕方ないし……」

優衣 「うん……このまま、きていいよ」

優衣 「……んんっ、く……う、うううつ、ぐ……!」

優衣 「ふ、ふうっ……だ、大丈夫……そのままで……うぐ、う、ううつ……」

優衣 「これ、入ってる? ……半分、くらい? ううつ、もう半分、あるの? んんぐっ……!」

優衣

「う、ぐ、ぐぐっ……そ、そのまま、いいから……ぐ、うっ……き、きてっ……!」

優衣

「いッッ、ぐいいいいいいい——」

——ッッ

!——!」

優衣

「ぐ、ううっ……く、ふっ……ふうっ……ふうっ……ふうっ……」

優衣

「今のって……ぜ、全部、入った? ……入ったんだ。はあ……良かった」

優衣

「……うん、いきなりズキンって痛みが走ったけど、動かなければ今は大丈夫」

優衣

「ああ……これで処女喪失。ロストバージンしちゃったね」

優衣

「ん、ふふっ、別に後悔してるわけじゃないよ。それに……あなたなら……いいかなって思ったから」

優衣

「……うん、本当に……なんか……告白しちゃったみたいになってるけど……」

優衣

「ん、好き? んん、そりゃ好きか嫌いかで言えば……好き、だけど……」

優衣 「……っていうか、今話すことじゃないよね。
こんな入れたまんまで」

優衣 「少しは落ち着いてきたから……動いていいよ」

優衣 「うん、ゆっくりしてくれると嬉しい……けど、あなたが気持ち良くなるようにやってみて」

優衣 「……ん、うっ……んん、ふ、う……んんっ……んんっ……」

優衣 「だ、大丈夫……この、くらいの……スピードなら……」

優衣 「んうっ……く、ふっ……ん、んっ……くうっ……ふうっ……ふううっ……」

優衣 「熱い……す……く……あ、あっ、こんなに……んんっ、熱くなるんだ」

優衣 「ふう、くっ……あなた、は……どう？ んんっ、どんな……感じ……？」

優衣 「気持ち……く、ふっ、いいの？ んっ……ん、うっ……そう、なんだ、あ……良かった」

優衣

「くふ、うつ、し、心配、するよ……くうつ、ど、どうなのかなって、んんっ、思うし……」

優衣

「だから、あ、んん、気持ち、良く、うつ、なあって、る、なら……あ、あっ、安心、する……」

優衣

「ん、んうつ……んんっ、はあっ、はあっ……もう少し……速くしても、んくっ……だ、大丈夫かも……」

優衣

「ふうっ……痛い、んだけど……ちよつとずつ、う、慣れて、きてる、ような……きてない、ような……」

優衣

「でも、ん、んうつ……いいよ……く、うつ、速く、して、みないと……わかんないし……」

優衣

「痛くて、んくっ、ど、どうしても、が、我慢、できなかったら、あ、また、お、遅くして、く、う、くれたら……いいから……」

優衣

「んっ、んっ、んうつ、んんっ、うつうつ、う、ぐ、うつうつ、ぶうつ、ぶうつ、ぶうつ……」

優衣

「うぐっ、も、もう少し、だけ……ゆっくり」

優衣

「うん。もう少し遅い感じなら……大丈夫……」

優衣

「んぐ、う……ん、んっ……んん、うっ……う、う、ううっ……んく、うっ……！」

優衣

「くふうっ、んん、う……ふ、うっ、くうっ……んっ、んっ、んあっ、うっ、くっ……ふうううっ……！」

優衣

「すごい、ね、うあっ……私達、ふうっ……ふううっ……今……んんっ……セックス……してるんだね」

優衣

「こんなふうに、なる、なんて……んあっ……朝まで、あ……思っ……なかつた……けど……」

優衣

「くふっ……ふふっ……なんか、嬉しい……かも……んんうっ……！」

優衣

「ふうっ、ふうっ……んんっ……あ、いいよ、……スピー……ド、早くしても……」

優衣

「アソコ……熱くて……んっ、痛いのが、に、鈍ってきたみたいな……んうっ……感じがするから……」

優衣

「それより、イ、イけ、そう？　このまましてたら……んうっ、イけそう、なの？」

優衣

「あ、でも待って……んんっ、勢いで、し、しちゃったけど……んく、うっ……中は、あ、さすがに……んんっ、う……」

優衣

「く、ふっ、あゝっ、でも……ど、どうしようかな……ん、んうっ……これ、言うのは……ちよっと恥ずかしいけど……たぶん、だ、大丈夫……」

優衣

「うん、大丈夫……な、日、だから……んうっ……んん、くっ……んっ、んっ、んっ……」

優衣

「だから……あ、あっ……もう、中で……いいよ」

優衣

「んぐっ、うっ、ち、ちよっと！　なに、い、勢いが、強く……んく、う、ううっ……」

優衣

「もしかして、くふ、ふっ、興奮、した、の？
んうっ、んううっ……ん、ん、んっ……！」

優衣

「そんな顔……しちゃって……んんっ、く……
……なんか、うれ、しい」

優衣

「んは、あっ、いいよ……んくっ、そのまま……
……う、動いて……ん、あっ、大丈夫に、なっ
てきたから……」

優衣

「はあっ、はああっ、あ……ん、は、あっ、ふ
あっ……ああっ、熱い、ああっ、こんなに……
……んは、あっ……あああっ……！」

優衣

「いいよ、出して……ん、あっ、中で、イって
いい、よ……あっ、ああっ、あああっ、ああ
ああっ……！」

優衣

「あふっ、あ、あああっ、ん、はあっ、は
あっ、はああっ、息、くるしっ、ひ、あっ、
あああっ、頭、あ、と、飛ぶっ、う、飛ん、
じゃいそ、お、ああっ、はあ、あああっ……
……！」

優衣

「あああっ、音が、あ、すごい、あ、ああっ、ん、はっ、それに、あ、んうっ、お腹に、ひ、響く、う、はっ……すご、ひっ、揺れて、う、あああっ、お腹の、奥まで、んあっ、と、届いてる、みたい」

優衣

「んはっ、ああっ、ふ、はっ、んはあっ、く、はっ、うあっ、うああっ、ん、ああっ、体が、揺れて、ん、はあっ、あ、あ、あっ、熱い、けど、ああっ、なんか、ち、ちよっと、いい、かも……!」

優衣

「気持ち、い、いい、かも、ん、はあっ、変な、感じが、あ、ふあっ、う、ああっ、こんな、の、はじめ、て、ん、はあ、あ、ふああっ……!」

優衣

「イ、イき、そう?　すごい、んはっ、速い、よ、んあ、ああっ、いい、よ、イって、んあっ、イける、なら、あ、あっ、いいよ、中っ……んはあっ、中に、出して、ああっ、いいから、あ、んあっ、あああっ……!」

優衣

「あ、うあっ、あ、ああっ、ふ、はあっ……
あ、あ、あっ、ああああっ、んあっ……あ
あっ、あああっ、ああああっ、あ、あ、う
あっ、う、はあっ、ああっ、く、はあっ、あ
ああっ、あああああッ!」

優衣

「あッ……!？」

優衣

「あ、あ……何か……きて……お腹が
あったかい」

優衣

「あなたは……どうだった? ……イけた
んだから、良かったってことだね?」

／＼ヒロイン立ち位置：9

優衣

「うわゝ……それにしても……血が垂れて体操
着についちゃった。これ、落ちるかなあ?」

優衣

「それに、……今更になってお腹のズキズキが
戻ってきて……私の……おまんこ……にも違
和感があるし」

優衣

「ううつ、これ、ちゃんと歩いて帰れるか
なあ?」

トリック●帰り道

優衣

「んわっ……!」「ごめん。またもたれか
かつちゃって」

優衣

「はあ……意外と下り坂が辛いんだよね」

優衣

「ホントにごめん。なんか……足の踏ん張りが
きかなくって」

優衣

「あはは……気にしないでいいって？ ……自
分のせいだから？ ……あっ、照れた照
れた」

優衣

「でも、まだ痛むし……お言葉に甘えて……
肩、貸してもらうね」

優衣

「はあ……やっと落ち着いてきた感じがするけ
ど………教室の掃除、ちゃんとできてたよ
ね？」

優衣

「なんか今になって不安になってきちゃったけ
ど」

優衣

「まあ、人に言わなかったら大丈夫だよね。…
………本当に絶対に誰にも言っちゃダメだ
よ？」

優衣

「うん、そこは信用してるから。約束ね？」

優衣

「でも………本当にびっくりだよね。こうい
う事になるなんて……」

優衣 「えっ？ 私達の……これから……？ こ、これからって言われても……」

優衣 「今まで通り、は……ちよつと無理かな？ あはは、絶対意識しちゃうよね」

優衣 「あなたの事は……クラスで一番仲が良かったし……いいなって、思ってたかもしれないけど……」

優衣 「うん……そう……実はそうなのです」

優衣 「ん、もうっ、こういう話するほうが恥ずかしいし……はい、この話おしまい！ また明日っ！」

優衣 「……そう、明日……明日、またゆっくり話そ」

優衣 「えっ？ 誰かいると話にくいし……ほ、放課後でいいんじゃない？」

優衣 「うん、放課後……って、その顔、何考えてるの？ 話するだけだよ？ き、今日みたいな……のは……さすがに危ないんだから」

優衣

「どうしても……したいんだったら……今
度は、ちゃんと準備してからね」
